

氏名 赤羽尚美

学位の種類 博士(文学)

学位記番号 甲第27号

学位授与の日付 2016年3月18日

学位授与の要件 学位規則第11条第1項該当

学位論文題目 絵本と育児(育自)一子どもと大人、それぞれの発達

論文審査委員 主査教授 藤本朝巳

副査教授 富樫剛

副査 白百合女子大学教授 田島信元

博士学位論文 要約

本論文は、本研究の主題と絵本の意義を述べた第Ⅰ部(序論から第2章まで)、絵本を紹介した養育者と子どもの社会的相互活動について理論および実証研究から論じた第Ⅱ部(第3章から第7章まで)、本研究の展開と結論をまとめた第Ⅲ部(第8章から第10章)で構成されている。これらを通して、親子の読み聞かせ活動の媒体となる絵本が、大人と子どものやりとりを助ける視覚的コミュニケーションメディアであることを提示した上で、家庭での読み聞かせ活動が及ぼす子どもと養育者への発達効果、および読み聞かせ活動に影響を及ぼす養育者の絵本観と育児ストレスを検証した。以下に序論および各章の概略を示す。

第Ⅰ部 本研究の主題と絵本の意義

序論

本研究の目的は、文学的視点から絵本の特性を捉え、家庭における親子の読み聞かせ活動の効果を心理学的手法によって検証すると同時に、読み聞かせの中断や育児ストレスなどの負の側面も検討した上で、絵本や読み聞かせにおいては、養育者にとっても「楽しさ」が重要であることを再認識することである。

読み聞かせは、幼児期の子どもを持つ家庭の多くが行う育児行為の一つといえる。育児においては、少子化や核家族化などの社会的変化を受けて養育者の育児力が低下し、育児不安や児童虐待の増加が対応を要する危急の課題となっている。特に、幼い子どもにとって母親(主な養育者)と安定した信頼関係を結ぶことの重要性は古くから指摘されているが、今日に至っては種々の社会的事情などによって、親的な資質が育まれないことが少なくない。こうした中で、読み聞かせは、本来養育者と子どもの双方が楽しめる育児行為であり、共同行為として両者に相互発達の機会を与える活動であることが先行研究によって

実証され、相互作用の手段となる絵本や社会的相互活動の場となる読み聞かせの重要性が着目されてきた。

また、文学的な研究では、絵本も学問的なアプローチの対象として、文芸学、作家・作品論、文学史、文献・書誌学など従来の研究方法に読者論を加えて、心理学的な視点を取り入れた研究も見られるようになったが、評価に値する心理学的な切り口を持つ絵本論は少ないことが指摘されてきた。しかし、文学理論を基盤に Bruner (1990) をはじめとした心理学や、最新の脳神経科学などを取り入れた認知批評 (Nikolajeva, 2014) が試みられ、絵本も認知的なアプローチなど多様な視点から分析されるようになってきている。今後は、一層さまざまな学問分野との複合的な絵本研究が期待されるだろう。

このように、絵本学が発展し、昨今の絵本ブームを反映する読者層の広がりを見るように、絵本を学んだり楽しんだりする大人が増えた一方で、最多読者層である幼い子どもの養育者にとっての絵本は、子どものために読んであげなくてはならない本として、ストレスを与える可能性も考えられる。しかし、1970年代以降、多くの読み聞かせに関する研究が、教育や発達心理学などの領域で発展してきたが、養育者の絵本受容を問うことは比較的少ないといえる。そこで、絵本の読み手となる幼児の親たちが、子どもに絵本を読むことを通して、どのような効果を得るかというプラスの側面に加え、読み聞かせが中断される場合や育児ストレスとの関連など負の側面も踏まえた上で、養育者の絵本観を心理学的に検証し、家庭から更には社会の中で絵本や読み聞かせの意義について知見を深めることを本研究の目的とした。

研究方法は、冒頭で述べたように 3 部形式としている。第 I 部は本序論に続いて、絵本とは何かを問う第 1 章、絵本の発展との関わりで重要な子ども観の変遷について論じた第 2 章で構成した。

第 II 部では、絵本を親子のやりとりを促す心理学的道具とみなす立場から、中心となる理論的背景と先行研究について、第 3 章と第 4 章にわたって論じた。第 5 章は、読み聞かせを通じた子どもの社会性の発達、および読み聞かせ活動の展開に必要な養育者の足場作りについて、幼児の保護者への質問紙調査と家庭での読み聞かせ場面の観察によって考察した。第 6 章は、養育者の絵本観と育児ストレスとの関連について、養育者への質問紙調査の分析結果に基づいて検討し、読み聞かせを通じた親的な発達を考察した。第 7 章は、第 6 章の調査について読み聞かせと育児ストレスとの因果関係を検証した。第 II 部は、これらの調査研究を通して、読み聞かせ活動が子どもと養育者に及ぼす影響を心理学的視点から分析するとともに、両者のやりとりを通じた絵本の読み取りを文学的受容論の視点も踏まえて考察し、子どもばかりではなく、大人も楽しく絵本や読み聞かせと関わっていくことの重要性を論じた。

第 III 部では、第 II 部の展開として、親子がともに学び合い、楽しく絵本を読み合うために行った実践活動の試みを第 8 章にて報告し、大人も子どもと同じように、文字に頼らずに絵本の絵を読み取ったり、絵本の楽しみ方を広げたりするための養育者への支援の可能

性について論じた。第9章と第10章は本論文の結論として総合的考察を行い、本研究の概要をまとめ、研究を始めた経緯や背景と目的を振り返った上で、現代社会における絵本や読み聞かせの意義について、「絵本」「やりとり」「楽しさ」「親子の相互発達」をキーワードとして総合的に考察した。

第1章 絵本とは何か

第1章では、絵本の歴史と定義、文学的視点による絵本研究の先行研究をまとめている。絵本は、その起源に古い時代の洞窟壁画や絵巻物などがあり、絵でことばを伝え、生活のための情報や宗教、教育的な内容を共有したり、見ること、語ることによって人々の暮らしに楽しみや喜びをもたらしたりする、識字文化普及以前からの営みの中に始まりを見ることができる。絵とことばの組み合わせは、古くから人にとって必要なコミュニケーション形態の一つであり、現代の絵本形式の基本的要素といえる。

絵本を定義する場合、「絵と文を有機的に組み合わせて作った本」(三宅, 1997)といわれるように、絵と文、つまり絵画と文学という本来性質の異なるメディアの複合体であり、両者が相互に深く関わりあってまとまった表現世界を物語るメディアと考えられている。また、絵本の機能には、世界で初めての絵本といわれるコメニウスの *Orbis Pictus* (1658) 『世界図絵』が、絵のイメージを利用して、子どもに楽しみを与えながら知識を授けることを意図して作られたように、「教育的な機能」をはじめとして「物語を伝承する機能」「独自のアート機能」があると三宅 (1997) は述べている。とりわけ、教育的な機能は、子どもを読者と想定する絵本では特に重視されていたといえるだろう。

また、吉田 (1999) は、1970年代までのアメリカの絵本をもとにした Bader (1976) の定義から、ダイナミックな連続性を表現することが可能な「向き合うページの同時提示」を絵本の芸術形態として重視し、絵本は社会・文化的、歴史的ドキュメントとして研究対象になりうると述べている。さらに、絵本を視覚表現メディアと捉える中川 (2011) は、「絵本とは自分の手指で関わり合う視覚表現媒体である」と定義し、読み手と聞き手のコミュニケーションだけではなく、読者と作品のインタラクティブ性に着目した視覚的コミュニケーション機能を重視している。

以上のように、絵本は子どもを読者対象としてさまざまな機能に着目されながら、まずは18世紀のイギリスに創作の基盤が築かれ、印刷技術の発達や子ども観などの社会的な影響を受けて、19世紀を通して現代絵本の様式が確立した。そして20世紀初頭には、Beatrix Potter が *The Tale of Peter Rabbit* (1902) を刊行したように、絵もことばも一人の作家が作る理想的な創作形態に至った。その後、イギリスをはじめアメリカでも個性豊かな絵本作家たちが活躍した絵本の黄金時代を経て、21世紀の現代では中川 (2011) が述べているように、絵本は芸術の一形態ともみられるようになり、ブックアートメディアと称される作品も登場している。絵本は、先進国を中心として世界中に普及し、多様化、大衆化とともに、商品的価値のほか表現様式としての芸術性がいっそう重視されているといえよう。

日本においても、子どもを対象とした絵本は『世界図絵』とほぼ同時期の江戸時代から存在し、絵草子や絵雑誌の形態を経て、西洋と同じように印刷技術の向上や子ども観の影響を受けて大衆化し、大正期、昭和期には出版数が著しく増加した。しかし、日本の絵本出版の発展に影響した子ども観は西洋のものとは異なり、絵本は国の将来を担う子どもを国民として教育するための一手段でもあったと考えられている（鳥越，1973）。第二次世界大戦後には、海外の絵本の翻訳出版も積極的に行われるようになり、輸入絵本なども加わって20世紀末から絵本ブームといわれる時代が長く続いている。こうした絵本の出版状況は、西洋的な子ども観や教育思想の普及に加え、社会経済や印刷および科学技術の発展、絵本を求める需要層の拡大などを示唆し、創作側にも表現の可能性を広げる一方で、多種多様化した絵本の定義づけを困難にしているともいえる。

絵本はメディアの一形態としてさまざまに変化する可能性を持つが、絵本の視覚表現によるインタラクティブ性は、他者とのやりとりを促し、楽しみや共感を分かち合う経験をもたらすコミュニケーション機能として、個別的な美術鑑賞や読書とは異なる重要な特徴であると考えられる。絵本の持つこの特徴が、第Ⅱ部で述べる読み聞かせの心理学的発達研究をする上で、最も重要な視点といえよう。

文学的な絵本研究は、日本では世界に先駆けて絵本学会が1997年に設立され、2002年より絵本研究誌『BOOKEND』が毎年創刊されている。また、絵本学会会員をはじめ、各専門分野の研究者からの協力を得て刊行された『絵本の事典』（2011）は、学問の対象として確立した絵本の研究書として、絵本に関係する可能な限りの学問分野を網羅したアプローチを提示し、『BOOKEND』と共に絵本研究の指針となる情報を提供している。

『BOOKEND』は、2007年以降、翻訳研究書、作品・作家論、自伝、読者論、図録・画集、絵本リスト（ガイド）、実践報告書、研究書、紀要論文、絵本制作、編集者による絵本論など多岐にわたる最新の絵本研究の動向を取り上げている。これらは文学的研究に限定されず、美術や保育・教育学、心理学、歴史学、衛生学など幅広い視点からのアプローチを含み、また、大人の自己啓発やセラピーの手段としての絵本論など、子どもを読者対象としない絵本の在り方も紹介している。絵本は、読書経験が未熟な子どもの教育や発達に役立つことや楽しみとなることを主として発展してきたメディアであるが、今日の子どもの観の変容と合わせて、大人読者という視点を加えた絵本の読者論を論じる必要があるといえよう。

第2章 子ども観の成立

今日普及している様式の絵本は、西欧で19世紀半ばから現代までの作品を含めて、現代絵本と呼ばれているものと同じであるが、現代絵本は近代の子ども観の影響を受けて発展してきたと考えられている（石井，2013；加藤，2010；永田，2013）。子ども観の社会史研究は、Ariès（アリエス，1960 杉山・杉山 訳 1980）がパイロット的な存在として評価されているが、アリエスが論じたように、近代に入って次第に認められるようになった子ども期

は、子どもも社会的存在であるゆえに、マクロな視点ではその国家や政治、ミクロな視点では生活文化や家庭などの影響を受けて、脈々と変化し続けているといえる。

子どもの時期に特有な衣服や教育、成長発達への保護の必要性は、17世紀頃から大人の認識の中に芽生え始め、「児童の世紀」(Key, 1900 小野寺・小野寺 訳 1979)と称される20世紀には、子どもの権利が世界的に認められるようになり、子どもは権利の客体であるばかりではなく、主体であるという見方も生まれた。しかし、今日に至っても、世界のすべての国で現代的な意味での子ども期が保障されているとは考えられず、未だに多産多死の発展途上国や、家族を支える労働力となっている子どもも少なくない。

また一方で、少子化が深刻な先進国では、子どもは社会資源としても大切に扱われ、学校制度をはじめ、子どものための教育や文化が発展し、教育産業や玩具業界は子どもを重要な消費者とみなしていると考えてもいいだろう。特に、日本では1970年代頃から教育熱が高まり、「受験戦争」「教育ママ」などという用語が見られたように、受験ブームの低年齢化、幼児教育の普及などを背景として、絵本も子どもを対象にした教育的な要請を一因として発展してきたと考えられる。

しかし、こうした教育への関心は、合理的に課題を達成することに偏りがちとなり、子どもらしく自由に想像力を発揮したり、遊んだりする時間を減らし、大人と同様のストレス現象を生み出すことが危惧されるようになった。海外からは、「教育の永遠の労働者」(Jones, 2010)と批判されるような子どもたちが増え、子どもたちの疲弊に気付かない養育者や、成長発達に必要な健康的な生活への配慮を欠く家庭も増えている。つまり、保護や教育の対象として十分な配慮を受けられない子どもは、発展途上国ばかりではなく、我が国のような先進国にも存在しているといえる。

さらには、1950年代頃から普及したテレビをはじめ、現代ではスマホやインターネット、SNSを通じたオンラインゲームなどが普及し、大人も子ども同様にゲームに夢中になる姿が見られるようになった。こうした視覚メディアの発達や普及は、文字文化に見られるような大人の優位性を奪い、情報の氾濫を防ぐ大人の保護力を弱体化することにより、大人の世界と子どもの世界の境界を崩し、子ども時代が消失の危機にあることも指摘されている(Postman, 1994)。つまり、現代社会においては、大人が子どもの健全な成長や発達を守る義務を、十分に果たすことを困難にする社会的な変化があると考えられる。

子ども期の喪失が危惧される今、子どもの成長にとって一義的な場である家庭から、子どもの健康な発達や成長に必要なことを再考する必要がある。絵本は視覚メディアの一つといえるが、幼児期では大人が子どものために選んで与え、読んであげることによって、子どもを不適切な情報から守り、安心と喜びを与えるメディアであると考えられる。また、読み聞かせは、読む大人と読んでもらう子どもの関係で成り立つ相互行為であり、両者の区分を維持するばかりではなく、子どもが大人に「読んで」と促しながら、自らの成長・発達に向けた主体となりうる活動ともいえる。絵本の読み聞かせは、古くから家庭の中で

行われてきた育児の一行為であるが、現代社会にとっても子ども時代の喪失を阻む活動として、一層の意味を持つと考えられる。

第Ⅱ部 絵本を介した養育者と子どもの社会的相互活動

第3章 絵本の読み聞かせと子どもの発達

第3章では、「読み聞かせ」という用語について再考し、絵本の読み聞かせに関する先行研究を紹介している。読み聞かせに関する科学的な研究は、Ninio & Bruner (1978) をはじめとして、1970年代後半より保育や幼児教育、発達心理学などの分野で次第に活発に報告されるようになったが、当初は子どもを対象としてその認知的発達が主に検証されたといえるだろう。

特に、読み聞かせ活動における母子相互作用は、発達初期の子どもにとって重要な着眼点となり、母親の足場づくりによる子どもの言語獲得が達成される過程が分析されたが、母親側の発話や行動と子どもの語彙発達への影響や関連を、プロセスとして量的に検証する必要があった。この点については、田島・中島・岩崎・佐々木・板橋・野村 (2010) が、読み聞かせを「絵本を介した記号媒介的相互行為で、養育者の『語りかけ』活動の1種」と定義し、Vigotsky (1934, 1962) の精神発達理論、Tomasello (1995) の共同注意、Cole (1996) のリテラシー獲得過程などの子ども・記号(言語)・養育者(年長者)で形成される三項関係を重視する理論をもとに、実証研究が進められてきた(e.g. 田島ら, 2010; 岩崎・田島・佐々木, 2010, 2011)。さらに、生涯発達研究の視点から、子どもへの関わりや育児意欲の向上などが、養育者側の発達として注目されるようになり、共同行為による相互発達は、育児支援の視点からも検証されるようになった(e.g. 板橋・田島・小栗・佐々木・中島・岩崎, 2012; 板橋・田島, 2013)。

読み聞かせは、このように家庭を対象とした研究では、親子のやりとりや母子相互作用、語りなどの視点に立つ研究が多く見られ(e.g. 栗山・瀬戸・蓮見・秦野・星・前川, 1995; 黒川, 2009; 藪中・吉田・村田, 2008, 2009)、その他にブックスタートの実践や効果検証の報告などもある(e.g. 秋田・横山・森田・菅井, 2003; 藤井, 2010; Moore & Wade, 2003)。

また、集団保育や幼児教育の場を対象とする研究(e.g. 佐藤・西山, 2007; 横山, 2003, 2006; 横山・水野, 2008)、障害児教育(e.g. 近藤・辻本, 2006, 2008; 鈴森ら, 2001)や心理臨床分野(e.g. 村中, 1984; 小川, 2008; 高橋, 1996)の他、絵本の内容や特徴、構造分析などに焦点を当てた研究(e.g. 石川・石川, 1994, 1995; 佐藤, 2004; 横山・無藤・秋田, 1997)などがあり、読み聞かせや絵本への関心は多岐にわたり、それぞれの学問分野からの研究実績が積み重ねられているといえよう。

第4章 理論および中心的先行研究の評価について

第4章では、第5章から第7章で論じる読み聞かせの調査研究に関わりの深い理論および先行研究として、Bruner & Ninio (1978), Bruner (1983 寺田・本郷訳 1988), 田島・岩崎・中島らを中心とする白百合女子大学生涯発達研究教育センターと、板橋・佐々木らをはじめとする日本公文教育研究会の共同プロジェクトによる一連の研究について評価を行った。

田島・中島・岩崎・佐々木・板橋・野村 (2010), 岩崎・田島・佐々木 (2011), 板橋・田島・小栗・佐々木・中島・岩崎 (2012) のプロジェクトでは、経験的に知られてきた読み聞かせの効果を、Trevvarthen (1979), Vigotsky (1934) や Cole (1996 天野訳 2002) などの先行研究を踏まえた理論と実践、科学的検証の結果から、「読み聞かせ活動の構造と機能の『2段階・5ステップ』発達モデル」として提示し、読み聞かせ活動における言語リテラシー獲得のメカニズムとプロセスが明らかにされた。これらの共同研究では、読み聞かせ中の母子双方の行動を対象として、相互発達を促すための養育者の関わり方が示唆されると同時に、家庭で行われる読み聞かせが、絵本（言葉・記号）を媒介する社会的相互活動であることが論証されている。

さらに、田島らの共同研究プロジェクトは、育児支援の立場から養育者が楽しく読み聞かせを行うための活動「こそだて ちえぶくろ」(板橋ら, 2012), および「Baby Kummon」(板橋・田島, 2013) の効果を検証し、読み聞かせにおける母子相互行為が、健康な母子関係形成や母親の育児意識に役立つことを示唆し、これらの育児支援プログラムの意義が実証された。しかし、言語リテラシー獲得や母子関係形成の介助をする絵本については、「お気に入り絵本」や「新規絵本」などに分けた分析も行われているが、子どもがどのような過程を経て絵本を受容していくのか、養育者がどのように関わって、親子が絵本を読み取っていくのかなどの具体的な説明には至っていない。

絵本が養育者の関わりによって、子どもに受容されていく具体的な経過は、佐々木(1992)が我が子との読み聞かせ体験に基づき、3歳までの幼児の絵本受容について分析している。佐々木は、繰り返し読んだブルーナの絵本などへの娘の反応から、絵本は母親（養育者）を通して、その感覚や感情、行為とともに子どもに伝えられ、子どもの認識の世界を広げていくとともに、子どもに絵本を読むということは、子どもの生活経験に根ざした理解を、絵本を通して親子で読み取っていくことであると述べている。

佐々木が論じた子どもの絵本の読み取りの過程は、質的な事例研究として量的な分析を補うものと考えられる。また、佐々木は、心理学的な受容論に文学的視点に立つ絵本研究も踏まえ、子どもの反応を促す絵本の内容や特徴も分析している。Nikolajeva (2014)によれば、Bruner (1990) が文学と認知科学の橋渡しをしたといわれるが、各専門分野を超えた複合的な研究は少ないことが指摘される中、佐々木の研究は、児童文学と心理学を結ぶ視点を持つ研究として評価に値すると考えられ、詳細な絵本の読み取り過程を、理論や科学的に検証されたモデルに即して検討する必要がある。

しかし、これまでの読み聞かせに関する先行研究では、読み聞かせの効果検証がほとんどであり、負の側面に焦点があてられることは少なかったといえる。子どもに絵本を読む大人の中には、「読み聞かせ」という言葉にさえ嫌悪を感じたり、疑問視したりする場合があります。「読みあい」「読み語り」の他、「耳からの読書」などという表現を用いることがあるように、子どもに読んであげなくてはならない絵本は、養育者にストレスを与える可能性も考えられる。

また、読み聞かせの効果が、経験的に広く知られるばかりではなく、科学的に数多く実証されて、絵本は子どもの発達や教育、母子相互作用や良好な親子関係の形成に役立つことが明らかにされているが、読み聞かせを十分に行わずに、幼児期の段階で止めてしまう家庭も存在する。本研究の意義の一つは、読み聞かせによる発達効果検証を追随することに加え、負の側面について養育者の絵本観や養育ストレスとの関連を踏まえて分析し、効果的な読み聞かせ活動が維持され、発展していくために必要な足場作りや、養育者の絵本の楽しみ方を広げる可能性を見出すことである。

第5章 調査研究① 家庭での絵本の読み聞かせ活動と子どもの社会性の発達との関連

第5章では、1歳代から6歳代までの子どもがいる家庭を対象として、読み聞かせの実施状況を把握し、読み聞かせと子どもの社会性の発達について質問紙調査による分析を行い、調査対象家庭の中から選んだ7家庭（0歳代男児1件、2歳代男女各1件、3歳代男女各1件、4歳代男女各1件）の読み聞かせ場面観察、および母親への半構造化面接を行った。

読み聞かせの実施状況では、絵本ブームの影響や子どもにとって良い経験となる家庭教育の一つとして認識されていることがうかがわれ、欠損値のない回答96件のうち85%以上の家庭が読み聞かせを行っていた。これらの家庭では、1歳までに読み聞かせを始める家庭が60%以上を占め、早期開始傾向が示された。また、読み聞かせは圧倒的に就寝前に行われることが多く、1回あたりの時間は5分～15分未満が約60%となっていることから、就寝前に絵本1、2冊を読むことを習慣としている傾向があると考えられる一方で、週あたりの頻度ではばらつきがあり、週1回以下の家庭も20%以上存在し、かろうじて読み聞かせを継続している場合があることも示された。

また、調査対象家庭では、母親が主に読み聞かせを行うという回答が90%以上を占め、読み聞かせは育児行為の一つとして、母子が1日の終わりに絵本を介して触れ合う時間となっていると考えられた。養育者の読み聞かせの継続意思では、75%以上の母親が積極的な意欲を持っていることがわかったが、時間が無いという回答や、子どもに一任するという回答も20%以上見られ、幼児期の段階で読み聞かせが中断される可能性もあることが示唆された。

このような読み聞かせ状況と子どもの社会性の発達との関連では、良好な社会的行動として「協調安定」と「友だち作り」、円満な対人関係を損なう可能性のある問題行動として「注意不足」の3つの因子を用いて比較分析を行った。その結果、1歳未満で読み聞かせを

開始した群が 2 歳以上で開始した群よりも「注意不足」得点が低く、有意な差が見られた ($F(2, 79) = 6.62, p < .05$)。「注意不足」は、読み聞かせの継続意思でも有意差が得られ ($F(2, 79) = 4.26, p < .05$)、積極的な継続意思を示した群が、子ども次第で継続を決める群よりも低い得点となった。また、1 回あたりの読み聞かせ時間では、「協調安定行動」に有意差がみられ ($F(2, 79) = 4.73, p < .05$)、5 分未満 < 5 分 - 15 分未満 < 15 分 - 30 分未満となった。

したがって、発達早期から養育者が意欲的に行う読み聞かせは、子どもの注意散漫な態度や自分勝手な行動を減じる傾向や、子どもに応じた適切な時間配分で行われる読み聞かせが、子どもの協調性や気持ちの安定性を促す傾向が示唆され、親子の相互行為として子どもの聞く力を育んだり、子どもの心が満たされて協調的態度を促進したりする可能性があると考えられた。

これらの結果は、読み聞かせ場面の観察、および母親へのインタビューからも支持できるものであった。読み聞かせに意欲を持っている母親は、子どもの変化に敏感に対応し、子どもの興味や気持ちを損なわない絵本を準備したり、時間を調整したりしていた。絵本は、子どもの成長や関心の変化に合わせて吟味され、母親は読み聞かせや選書を通して、子どもの成長に気付くことにより、さらに継続の意欲を高めていた。また、読み聞かせは心身の触れ合いの場となり、スキンシップや楽しさの共有により、言語的、非言語的なやりとりが親子間で活発に行われ、そのようなコミュニケーションを通して、母親が自分自身に自信を持ったり、子どものコミュニケーション力が豊かになったりすることが実感されていた。

一方で、2 歳女兒、4 歳女兒の家庭では、読み聞かせが中断される可能性が高いことが示され、母親の仕事や家庭の育児事情、子どもの絵本への関心の喪失、絵本に関する養育者の知識や関心の不足などが影響していた。特に、2 歳女兒の母親は、生後 3 ヶ月より絵本を介して子どもとのコミュニケーションを楽しんできたが、正職員として復職した後には家事や育児を一人で担当しており、子どもが満足するまで絵本を読んであげることができないことにストレスを感じていた。また、母親は図書館などで子どもの関心にそう絵本を探す余裕もなく、子どもが外遊びに興味を持つにしたがって、読み聞かせがほとんど行われなくなってしまった。

4 歳女兒のケースでは、3 歳上の兄が絵本に全く興味を持たなかったことから、家庭での読み聞かせはほとんど行われてこなかった。母親は、女兒も兄の真似をして外遊びばかりするので子どもに絵本を読もうと思わなかったが、病院の待合室などでは読んであげると楽しんでいるようだと感じていた。母親は、本調査に協力するにあたり、女兒と一緒に近隣の地区センターに出掛けて絵本を借りていたが、選書を子どもに一任してしまったために、読み聞かせに適切な絵本を選ぶことができなかった。母親が、自分自身が絵本を知らなくては良い絵本を選べないと思うという反省を述べたように、子どもが選んだ厚いアニ

メ系の絵本をひたすら読むことは、途中で飽きている子どもの態度を気にする母親にとって、ストレスとなっていたようである。

これらのケースでは、養育者が子どもの経験や生活、発達や好みに適った絵本を選べないことや、身近に備えたりできないことその他、読み聞かせの適切な時間配分を行えなかったことなどが中断の一因であり、4歳女児の母親が実感したように、養育者が絵本に興味を持って関わることの重要性も示唆された。また、多忙な2歳女児の母親のように、良い母親であろうとして子どもの要求に応えようとするあまり、読み聞かせがストレスをもたらすことも示唆され、健康な親子の読み聞かせ活動を推進するためには、このような負の要因を補う支援や助言が必要であると考えられた。

第6章 調査研究② 幼児の保護者の絵本観と養育ストレスとの関連について

第6章では、幼稚園児の保護者223名を対象として、読み聞かせと絵本観、養育ストレスとの関連を分析した。第5章と同じように、調査対象となった家庭の70%以上が調査時点で読み聞かせを行っており、その内60%以上が1歳未満で読み聞かせを開始し、2歳までに読み聞かせを始めた家庭は合計90%以上であったことから、発達早期からの読み聞かせの導入が定着していると考えられた。

一方で、約15%の家庭では、読み聞かせが既に中止され、2歳～3歳頃までに止めてしまったケースが半数を占めていた。読み聞かせを中止した理由は、「子どもが一人で読むようになった」が40%、「子どもが絵本に興味を失った」が30%、「養育者が絵本を読む時間がない」が30%であり、文字の習得や、身体活動の活発化などによって関心が他に移る子ども側の理由と、養育者側の多忙さの双方が見られた。子ども側の一人読みは、田島ら(2010)が述べているように、言語リテラシー発達の一段階であるが、子どもの主体性を損なわないように養育者が関わることは必要であり、子どもに一任してしまうことによって、子どもの絵本への関心の低下を招くとも考えられる。また、こうした「子ども任せ」の背景には、養育者の絵本への関心の低さなど、絵本観の影響がある可能性も考えられた。

読み聞かせを継続している家庭では、約半数が週当たり4回以上の頻度で子どもに絵本を読んでいたが、週3回以下の家庭も半数以上みられ、読み聞かせは家庭ごとにそれぞれの頻度で続けられていた。養育者が読み聞かせを楽しんでいるかどうかでは、約85%が楽しいと回答したが、読み聞かせをする理由では、自分自身の楽しみをあげる回答は13%程度にとどまり、絵本を自らの楽しみとしても読んでいる養育者は少ないと考えられた。また、それほど楽しくない、あるいは無理をして読み聞かせを行っている回答も15%ほどみられ、読み聞かせが養育者にストレスをもたらす可能性もあることが示唆された。

家庭での読み聞かせは、子どもの楽しみ(92.4%)や子どもとのコミュニケーション(69.8%)、教育(42.4%)、子どものリラックス(29.7%)などを理由に行われることが多い。養育者がこのような願いを持って、子どものために絵本を読む中で気付くことは、子どもの成長(82.0%)や子どもの気持ち(65.7%)であることが多く、育児の知恵やアイデ

ィア (19.8%), 親としての気持ち (15.7%), 親としての成長 (3.5%) などの養育者自身への振り返りは少ない傾向があった。

これらの結果から、養育者は絵本を子どものための本と考え、子どものためだけに読んでいることが多い可能性が示唆され、幼い子どもの養育者と、児童文学をはじめとした研究者や絵本の作り手たちが考える絵本観には違いがあると考えられた。

養育ストレス感との関連では、家庭での読み聞かせ状況と「子どもペースストレス」「子ども理解ストレス」「自信不安定ストレス」「コミュニケーションストレス」「気遣いストレス」の 5 因子を用いて比較分析を行った。その結果、読み聞かせ実施群と非実施群における「子どもペースストレス」では、読み聞かせ非実施群のストレス得点が有意に高いことがわかった ($t(221) = 2.69, p < .01$)。

また、読み聞かせの開始年齢では、「子どもペースストレス」($F(4, 218) = 4.06, p < .01$)、「子ども理解ストレス」($F(4, 218) = 3.22, p < .05$) で有意差が認められ、読み聞かせ非実施群の「子どもペースストレス」が、読み聞かせを 1 歳未満で開始した群よりも 1%水準で有意に高い得点を示し、「子ども理解ストレス」では、1 歳未満で開始した群よりも 1 歳以上 2 歳未満で開始した群が、5%水準で有意に高い得点を示した。さらに、読み聞かせを楽しんでいるかどうかでは、「気遣いストレス」($F(4, 218) = 2.70, p < .05$) において、読み聞かせを無理して行っている群が、読み聞かせをとて楽しんで感じている群よりも 5%水準で有意に高い得点を示した。

以上、発達早期から読み聞かせを始めて継続している場合には、子どものペースに合わせた対応や、子どもの考えや気持ちを理解して関わろうとするストレスが低いことが示唆された。したがって、養育者が子どもと絵本を読み合う中で、合理性や効率性を優先しない養育態度を体得したり、子どもの話に関心を持って理解しようとするコミュニケーション能力が高まったりするなど、親的な資質が育まれる可能性があると考えられた。また、読み聞かせを無理して行っている場合には、厳しい叱責や虐待につながりかねないストレスが高いことが示唆され、子どものために良いことはしなくてはいけないと頑張り過ぎるストレスを抱えている可能性も考えられた。

読み聞かせや絵本は、子どもばかりではなく、養育者にとっても楽しめることが何よりも重要であり、養育者が絵本をよりいっそう楽しく読むための育児支援の充実も望まれよう。

第 7 章 調査研究③ 幼児の保護者の養育ストレスと読み聞かせとの因果関係について

第 7 章は、第 6 章の調査協力者の中から 217 名を対象として、読み聞かせと養育ストレス感、子どもの行動認知との関連を分析し、読み聞かせ状況と養育ストレス感の因果モデルを推定した。

子どもの行動認知では、自分の子どもに対する「責められ感」と「見守り感」、他人の子どもに対する「被害感」と「成長客観」の 4 因子を用いて、家庭の読み聞かせ状況（読み

聞かせの有無、開始年齢、頻度、読み聞かせの楽しさ、読み聞かせをする最も大きな理由、読み聞かせをとおした最も大きな気付き)との比較分析を行った。その結果、「見守り感」($F(4, 212) = 2.62, p < .05$)が読み聞かせをする理由で主効果のみ有意であった。「責められ感」「被害感」「成長客観」の下位尺度得点と読み聞かせ状況にはいずれも有意差が見られなかった。

養育ストレス感では、「関心ストレス」「尊重ストレス」「虐待傾向ストレス」「意思伝達ストレス」の4因子を用いて、読み聞かせ状況との比較分析を行った。その結果、「虐待傾向ストレス」が「読み聞かせの楽しさ」($F(4, 212) = 3.47, p < .01$)、「尊重ストレス」が「読み聞かせをする最も大きな理由」($F(4, 212) = 2.85, p < .05$)で有意差が認められた。読み聞かせを無理して行っている群の虐待傾向ストレス得点は、読み聞かせを「とても楽しい」「まあまあ楽しい」「それほど楽しくない」のいずれの群よりも1%水準で有意に高い得点を示した。また、読み聞かせを行っていない群は、子どものリラックスのために読み聞かせを行っている群に比べて、「尊重ストレス」が5%水準で有意に高い得点を示した。これらの結果は、第6章と同様に、読み聞かせにおける養育者のストレスの危険性を示唆すると考えられ、育児ストレス緩和のためにも、絵本を読む親自身の楽しみを軽視してはならないといえるだろう。

子どもの行動認知4因子と養育ストレス4因子は、「責められ感」と「関心ストレス」および「意思伝達ストレス」で正の相関がみられ、子どもの成長ともいえる行動を否定的に捉えがちな傾向と、子どもに関心を持って話を聞いたり、子どもの行動や意思を理解して接しようとしたりするストレスの高さとはある程度関連があることが示唆された。しかし、子どもの行動認知4因子は、虐待傾向ストレスとは相関が見られなかった。

これらの結果を踏まえて、読み聞かせの有無や開始年齢、楽しさに影響する養育者の読み聞かせの意欲は、虐待傾向ストレスの高さと負の関係を示すモデルを、共分散分析によって推定した。

第Ⅲ部 本研究の展開と結論

第8章 大人が絵本を楽しむための実践活動

第8章では、第Ⅱ部の調査研究結果を踏まえて、養育者が絵本や読み聞かせをより楽しむための支援を検討するために、探索的に行った絵本の勉強会の実践について報告した。勉強会は調査者の勤務先小学校で合計7回にわたって行い、参加者は小学校に通う児童(1年生3名、2年生2名、3年生1名、4年生1名)の保護者7名であり、その内の2名は乳幼児の子育て中であった。参加者はいずれも子どもが1歳未満で読み聞かせを始め、2年生と4年生の保護者は家庭での読み聞かせを既に行っていなかったが、4名は継続中であった。

勉強会の内容は、子どものための絵本選択や読み方といった視点から離れ、絵本の歴史や起源、作者の略歴や創作経緯、絵本の表現技法、描写された子どもの心理や発達の読み

取りなどであり、学んだことを活かす絵本創作やビデオ鑑賞なども加えて、大人の視点から楽しめることを重視した。

参加者は校内の読み聞かせボランティア活動を行っていたり、絵本に関する高い関心を持って日常的に子どもと読み合ったりしていたが、絵本の研究者や創作側が期待するように、自分自身が絵本を味わい、絵をよく読んで十分に楽しむというよりは、子どものための読み物として捉えている様子であった。初回勉強会時に配布した事前アンケートでは、4年生の保護者を除く参加者は、絵本の与え方や選び方、子どもに読むための新しい絵本を知りたいなどを参加理由にあげ、子どものために絵本を学びたいという意欲を見せていた。

また、読み聞かせをする理由では、第6章と同様に「自分の楽しみ」をあげる参加者は2名にとどまり、読み聞かせを通して気付くことでは、子どもの成長や気持ちには4名が回答したが、「親としての成長」は2名、「育児の知恵やアイデア」は1名であり、親自身の振り返りは少ないことがわかった。

参加者の中には、子どもが就学する前に読み聞かせを中止したケースもあり、就学とともに母親が仕事を持ったり、幼稚園で子どもが文字を覚えて自分で読めるようになってきたことなどが読み聞かせを止めた理由となっていた。しかし、就学後の児童の朝読書の時間では、ボランティアで訪れる保護者が読む絵本を、目を輝かせて聞いている子どもたちは多く、自分で読めるようになってからも読んでもらう楽しみは格別であると考えられる。

就学後は、国語の宿題で音読が課されることが多く、家庭では読み手と聞き手の逆転が生じる影響もあるかもしれないが、一人読みが出来るようになって、もう少し長く親子で楽しみを共有するために、養育者の絵本への関心を一層高めたり、楽しみ方を広げたりする必要があるだろう。

各回終了後のアンケートでは、参加者がそれぞれ回を追うごとに絵本への学びを深め、「絵本の表現技法にすごく驚いた。絵と文章の表現や作者の言いたいことなどを考えるようになった」「心理描写が理解できるとストーリーがとて深くなると感じた」「違う自分になった気がする」「絵本は人生を豊かにしてくれるかも」「読むことも創ることも楽しい」「持っている絵本をもう1度読み直してみたくなった」などの記述が見られた。また、読み聞かせを中止していた4年生の母親は、第3回目の勉強会で「子どもと一緒に楽しむ時間が幸せ。絵本は親子のコミュニケーションのきっかけになる」と述べ、読み聞かせを再開していた。

全回終了後のアンケートでは、「絵本は子どもの読み物であると同時に、大人も十分に楽しめる」「絵本は育児に役立つ」「絵本の勉強会を通して、読み聞かせをする意欲が高まった」「子どもが選ぶ絵本ばかりではなく、自分の楽しみとしての絵本も読んでみたい」の4項目に、7名全員が「とてもそう思う」と回答した。これらの回答から、絵本について新たな学びの視点を持つことは、養育者の絵本への認識を変化させたり、読み聞かせに対する意欲をもたらしたりする可能性が示唆された。読み聞かせを推進する支援は、ブックスタートや定期購読販売事業による絵本の配布の他、図書館活動、教育関連事業などが広く行

っているが、絵本は子どものための読み物であるという視点から離れて、読み手自身が絵本を味わう楽しみを深めるための活動の発展が期待されよう。

第9章 本研究の概要

第9章では、本研究をはじめた経緯として、ある子どもと一緒に絵本を読んだ経験があり、本研究は経験知としての絵本や読み聞かせの子どもへの影響を、科学的に検証するとともに、読み聞かせの手段となる絵本について知見を深めるために行ったことを述べ、続いて研究の背景と目的、結果と示唆についてまとめた。

本研究の背景と目的は、次のようにまとめられる。日本では、絵本は主に子どもに関わる学問分野で研究対象となってきたが、児童文学と発達心理学は近接領域にありながらも、両視点からの読者論が十分に展開されて来なかったことが指摘されていた。また、海外では、Bruner (1990) が認知科学と文学研究の橋渡しをしたといわれるにも関わらず、単一領域の研究を超えるものが少ないと指摘されていたが、昨今は認知批評論が現れ、文学理論を基盤として認知科学を取り入れた複合的な研究が目指されるようになった。しかし、日本では、子どもの文学体験における個々のテキストの作用や、読み聞かせと伝達手段となる絵本そのものとの関連が、詳細に吟味されることが少ない傾向にある。

また、子どもを対象とした読み聞かせの発達の効果は、養育者や子どもに関わる教育者などに経験的に知られてきたが、その効果をもたらす仕組みについては、理論的背景や裏付けとなる科学的検証が不十分であるという指摘もあった。この点については、白百合女子大学生涯発達研究教育センターと日本公文教育研究会による共同プロジェクトにより、理論的な基盤を持って実証研究が行われ、読み聞かせ活動の構造と機能が明らかにされ、2段階5ステップから成る発達モデルが提示された。

読み聞かせに関する研究は、早期教育への関心の高まりや絵本の多様化が生じてきた1970年代より、次第に多く見られるようになった。しかし、さまざまな読み聞かせ活動による効果が検証された一方で、乳幼児期に読み聞かせが行われないケースや、養育者のストレスとなるケースに対する検討はほとんどされていない。家庭での読み聞かせは、母親の育児行為の一つとして行われることが多く、近年は育児不安や育児ストレスによる我が子への虐待が増え続けている社会的な問題を鑑みれば、読み聞かせにおける負の側面を検討する必要がある。

以上のような状況を背景として、本研究には3つの目的がある。第1の目的は、文学的な視点から絵本とは何かを考察し、その歴史的経緯や定義、子ども観との関連を振り返り、視覚的コミュニケーションを基盤として発展してきた絵本が、個々の文化や認知的な違いを補って他者とのやりとりを促し、教育的な機能を備えていることを明らかにすることである。また、コメニウス(1658)に始まるといわれる絵本は、絵によって子どもの学びに喜びや楽しさをもたらすことが重視され、17世紀に萌芽がみられた子ども観とも関連がみ

られる。後に、イギリスを端として発展した絵本は、子ども観と密接に関連しながら、その教育的な機能や審美性、商品性などが問われ、変化し続けてきた。

21世紀を迎え、いっそう多様化した絵本は、その定義付けを困難にしているが、絵本が人と人を結ぶやりとりを促すコミュニケーション機能を持っていることは、心理学的研究につながる重要な要素といえよう。現代の子どもたちや、絵本を子どもと一緒に読む大人たちが、絵本から何を学び得るのか、また、絵本が果たす役割や読み聞かせの意義を考察することは、多様な絵本や価値に溢れる現代社会においても必要なことといえる。

第2の目的は、やりとりを促す機能を備えた絵本を読み聞かせの手段として捉え、心理学的見地から読み聞かせによる親子の相互発達効果と、読み聞かせ活動が展開していくために必要な養育者の足場作りに加えて、読み聞かせと養育ストレスとの関連、および養育者の絵本観を分析することである。

第3の目的は、親子の読み聞かせ活動を推進するにあたり、読み聞かせの方法や子どものための学びの視点だけではなく、養育者がより一層楽しく絵本を読み、読み聞かせに意欲を持てるようになるための支援について検討することである。

以上、3つの目的にそって、本研究の結果と示唆は次のようにまとめられた。絵本は幼い子どもの文学と見なされがちであるが、絵によるイメージは子どもの情動を喚起したり、意味の理解を助けたりするだけではなく、視覚的コミュニケーション機能によって、大人にとっても文化やことばの違いを超えて、他者とのやりとりを助ける役割を果たすことが可能である。また、絵本は「掌のメディア」(中川, 2011)といわれるように、手指で扱うことから読者の主体的な関わりを促し、絵と文を有機的に組み合わせた独自の表現様式を読み取ることにより、読者が自ら楽しく学びの世界を開く教育的な機能も兼ね備えている。このように、絵本は本質的に情報や知識を共有したり、伝達したりする機能を持ち、人と人をつなぎ、人とことばや絵などのメディアとのやりとりを促す道具的な要素を兼ね備えているといえよう。

このような視点から、絵本は読み聞かせ活動の記号媒介的道具として、認知的に差がある子どもと大人が体験を共有することに役立ち、子どもの認知発達や大人の親的な資質を育む可能性が第II部の調査から示唆された。しかし、家庭での読み聞かせは、子どもの文字の習得や興味の喪失、養育者の多忙などを理由に、幼児期中止されてしまったり、養育者が無理をしたり、楽しめずに続けられているケースもあり、読み手のストレスの存在が示唆された。読み聞かせを無理して行っている養育者は、虐待につながりかねないストレスを抱えがちであることが示唆されたように、子どもだけではなく、読み手の絵本や読み聞かせに対する楽しみ方を充実させる必要があると考えられた。

読み聞かせのストレスの背後には、育児の多忙さや良い母親であろうと頑張り過ぎる傾向があると考えられるが、多くの養育者は、子どもに絵本を読むことを通して、我が子の成長や気持ちに気付くことに意味を見出し、読み聞かせを「楽しい」と感じていると回答した。しかし、読み聞かせをする理由には、養育者自身の楽しみでもあるという回答は少

なく、絵本は子どものためだけに読むものと見なす傾向が示唆され、「子どものために読んであげなくてはならない」という認識は、ストレスを生む可能性もあると考えられた。絵本は「子どものもの」に限定しないという考え方が容認されるようになったが、育児中の大人にとっての絵本は、子どもだけの読み物として受容され、読み聞かせの楽しさを減じているのではないだろうか。したがって、親子の読み聞かせ活動が、共に喜びを分かち合い、楽しさを伝え合う経験となるためには、養育者の絵本への認識を変化させたり、絵本から学んだりする楽しみ方を広げる情報の提供をすることが、従来の読み聞かせ推進活動や育児支援をより充実させることに役立つと考えられた。

また、読み聞かせが継続的に行われ、子どもの成長に伴って親子の相互活動として発展的に変化していくためには、養育者による足場作りが重要である。幼児期では、親密な心身の触れ合いは勿論のこと、発達早期から読み聞かせを始め、養育者が適切な絵本を身近に備えて、時間配分などを考慮しながら読むことが足場作りとして重要であり、こうした配慮を持って養育者自身が楽しみ、意欲的に続けられる読み聞かせ活動が、子どもの聞く力を育んだり、協調的な行動を促したりすることが示唆された。養育者は、このような足場作りを通して子どもへの理解を深め、子どもの気持ちや行動の意味を察しながら、ゆっくりと子どもに合わせて接することを体得し、親としての成長が促されていくといえよう。

第10章 本研究の結論と意義

本研究の結論は次のようにまとめられる。絵本は、絵とことばを有機的に組み合わせて表現された見開きのページを、読み手が自ら手指でめくることによって生じる人とメディア、また人と人とのコミュニケーションを促す機能を持っている。絵本の絵によるイメージは、楽しさを伴って人の情動を喚起したり、文化や認知的に差がある他者との情報伝達を促したり、学び合うための教育的な役割を果たし得る。したがって、絵も含めたことば（記号）を有する絵本は、養育者と子どもを結ぶ心理的道具として、両者のやりとりを促し、読み聞かせの相互発達の効果を担うものと考えられる。

読み聞かせの過程では、子どもは絵本を介したやりとりを通して、養育者と共に経験を分かち合ったり、絵本の世界を読み取ったりしながらことばや意味を習得し、社会的な存在となることを学ぶ一方で、養育者は子どもの反応から成長や気持ちに気づき、我が子への理解を深める親的な資質を学び得ることが示唆された。つまり、読み聞かせは、ことばを媒介して学び合う養育者と子どもの社会的相互活動による発達の間といえるだろう。この学び合いの場には、何よりも「楽しさ」が重要であり、子どもだけではなく、読み手となる大人が、絵本や読み聞かせを十分に楽しむことが、育児ストレスの軽減や健康な親子関係の発達に重要であることが示唆された。

また、絵本は大人が子どもに読んであげる本であることが主張されてきたように、特に幼児期では、養育者と子どもと絵本で形成される並び合いの関係を必要とするメディアである。昨今は、テレビやインターネットなどによる視覚情報メディアの氾濫が、子どもと

大人の区分を危うくすることが懸念され、大人はメディアの有害性から子どもを守れないことが指摘されているが、絵本は視覚メディアの中でも、大人が選んで与えたり、読んであげたりすることによって、有害性を除去することが可能である。したがって、絵本は、子どもの健康な成長を守る大人と、大人によって選ばれたことばや楽しみを与えられ、保護される子どもという立場を分け得るメディアであり、読み聞かせは、大人が子どもを守る義務を果たすと同時に、子どもが積極的に養育者や絵本に関わることによって、主体的に自らの成長や発達を求める権利が保障される経験になるとも考えられた。

以上を踏まえて、本研究の意義は次のようにまとめられる。読み聞かせが発達研究の対象として、心理学や教育学、保育学などの子どもに関わる研究分野で関心が高まったと同様に、読み聞かせの手段となる絵本も一義的には子ども用の読み物として、子ども観の影響を受けて発展してきたといえる。しかし、現代では芸術分野をはじめとして、絵本の多様な価値が認められるようになり、絵本は子どものためだけのものと限定しないという考え方が容認されるようになった。こうした考え方は、絵本が学問の対象として広い研究領域から注目される傾向を生み出したが、幼い子どもと同じく、絵本の最多読者層となるその養育者にとっての絵本は、今も子どものためだけに読むものとされ、研究者や創作に関わる大人の絵本観とは異なっている。

幼児期の子どもの養育者の多くは、子どもの楽しみや認知的発達、生活リズムの確立や就寝前のリラクセス、親子のコミュニケーションなど、さまざまな願いを持って絵本を読み、子どもの気持ちや成長に気付くことを楽しみとしている。しかし、読み聞かせの楽しさは、このような子どものためという視点に限定されることが多く、絵本を読む時間を自らの楽しみと感じている養育者は少ない。読み聞かせが子どもを主体として行われることに異議はないが、読み聞かせの楽しさは、こうした子どもとの関係で得られる喜びと、子どもが絵本の中で発見をしながら学ぶ過程を楽しむように、大人も学びの要素を見出す読書的な楽しみ方の二通りがあると考えられる。養育者の楽しみは、後者に至らないことが多く、子どものために無理をして行われる読み聞かせでは、養育ストレスとの関連が示唆された。

このような視点から、読み聞かせにおける養育者自身の楽しさを軽視してはならず、共同行為から得られる楽しさと、文学的研究が着目しているような絵本観に基づく楽しみを得られるためのサポートを、育児支援活動として充実させる必要があることを論じたことは、今後の読み聞かせや絵本研究を進めるための視座を提示できたと考えられる。

また、本研究では、絵本がなぜ発達促進的なやりとりの道具となるのかについて、絵本の歴史やメディアという特性から考察し、絵本は本質的にコミュニケーションを促す視覚表現メディアであると同時に、子どもと大人がそれぞれに学び合える機能を持つことを明らかにした。そして、絵本は社会文化的産物の一つとして、子ども観の変遷とともに変化し続け、多様化しているが、幼児期では大人が与え、読んであげることが絵本の変わらない特性である。このことは、子ども期が消滅したとも警告される時代に、絵本や読み聞か

せが、子どもとして守られた安心できる経験を与える役割や機能を果たすと考えられ、読み聞かせは、今後、益々必要な社会的活動となることが予想される。

親子の読み聞かせ活動による効果は、これまでの先行研究を支持する結果として、本研究においても子どもの社会的行動や養育者の親的な関わりを促すことを示唆したが、健康な親子の成長や発達を阻害する養育者のストレスもあることを提示し、負の側面への対策や支援が重要であることを述べた。改めて、読み聞かせは親子が絵本を介して学び合い、楽しさを伝え合う活動となることが期待され、養育者と子どもが育ち合うことを助ける可能性を有している。本研究では、こうした親子の相互活動を心理学的に実証することに加え、絵本や子ども観について考えることにより、読み聞かせの社会的意義への知見をも得ることが出来たと考えられる。